

この度、「寺院しおり」をPDFデータにて掲載させて頂くこととなりました。

このしおりは、寺院様のご協力を得て寺院の成立から今日迄の歴史を探り、又、寺院の景観、本尊、諸仏像、什物を一冊の本にまとめたものです。

この「寺院しおり」は寺院様のご協力により**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィスが製作しております。

お寺の歴史は地域の歴史と密接に関わり、その土地や歴史を知る大変貴重な資料であるという思いから皆様にもご覧いただけるよう公開させていただくこととしました。

スキャンによる作業を行ったため、必要な箇所をお読みいただくに際し、少々取り扱いにくいものもございますが、何卒ご了承下さい。多少なりともお役に立てていただければ幸いです。

※ PDF ファイルのリンク先はネットワークの状況により予告なく変更する場合があります。誠に申し訳ございませんがPDF ファイルへの直接リンクはご遠慮下さいますようお願い申し上げます。

また、著作権等は放棄しておりませんので、掲載されている文章・写真の無断使用・転載などはご遠慮願います。

この「寺院しおり」PDF データは「**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィス」並びに「**いい寺.jp**」のホームページで掲載されております。

(有)光陽フォト・オフィス <http://coyo.jp>

寺院情報サイト**いい寺.jp** <http://e-tera.jp>



東北寺院の総合情報サイト

www.e-tera.jp **いい寺.jp**



曹洞宗
そうとうしゅう

貴峯山
きほうざん

月
げつ

峰
ほう

院
いん

曹洞
貴峰
月峯
院
法記



沖館の月峰院旧跡碑

十一面観音と沖館

当院は天正八年（一五八〇）東根沖館村（天正期迄は奥館）に万州雲龍大和尚により開山している。

天正三年、大浦（津軽）為信が最初に沖館の大光寺城を襲った時は南部の臣滝本播磨重行が城代であったがあえなく敗退させられた。『新撰陸奥国史（明治六・一八七三年）』によれば敗退した為信は、九月二十日、沖館の修験沖館観音堂の別当四代目堯光に『怨敵降伏』の百日祈願を命じた。翌年の正月二日満願となり再び大光寺城を攻め、滝本一族を南部に追いやった。

為信は戦勝を喜び、観音堂にさらに『国家安全、武運長久、天下泰平、五穀成就』を祈願することを命じ、同年三月、宝殿・拜殿・神器・武具・装束・三十石の家禄の山林を与え、八月には自ら如意輪観音絵像を描き寄進した。観音堂は延暦年中（七八二〜八〇六）坂上田村麻呂の建立で十一面観音を本地仏としていた。荒廢

を繰り返しているが寛弘四年（一〇〇七）恵心僧都（天台宗三十代源信座主）が一刀三礼して刻んだ十一面観音菩薩像を改めて本尊としていた。文龜三年（一五〇三）山形の湯殿山末修験の沖館親世音として貴峯山頂に再開山していたが、為信の大光寺戦勝利の後、天正八年（一五八〇）野火が蔓延し、一字を焼亡してしまった。その時、十一面観音像のみが運び出され傍の樹に懸けられていた。村人は菩薩が恙なく無事であることを喜んだが観音堂の再建はならなかった。



山門



本堂正面



本尊 十一面観世音菩薩像

月峰院の開山と本尊

村人は草庵月峰院万州雲龍庵主に十一面観音像を託した。草庵は是より旧きを改め、貴峯山月峰院と号することになった。その後沖館観音堂は貞享元年（一六八四）再建され貴法院となり改めて「奉寄進観音堂貴峯山月峰住持六世的心益徳代……寛文十（一六七〇）……」と像背に墨書された円空（江戸時代の高名な仏師）作の十一面観音を祀り神明宮沖館観音堂として崇敬を集めている。この観音像は津軽三十三観音の二十九番札所で県重文に指定されている。

月峰院に遷宮された今日の十一面観世音菩薩像は今、弘前にあっても「時ありて沖館に向く」と伝わっている。

平賀郡堀越に移転

為信は天正十八年（一五九〇）、最上義光を介して豊臣秀吉に對面し、津軽本領安堵の朱印状を賜った。奥州再任置軍の陣営に加わり、前田利家らによる太閤検地を終えて晴れて津軽三郡（平賀・田舎・鼻和）と合浦（外浜地域）の四万五千石の藩主となった。文禄三年（一五九四）四月、鼻和郡大浦（現岩木町）から平賀堀越（現弘前市）に都を移し、姓を津軽と改め、町づくりを行なった。

堀越城は南北朝時代は北朝側の曾我氏の拠点であったが南部に滅ぼされ、為信の実父大浦城主為則の弟で武田甚三郎守信の居城となっていた。守信の嫡男右京大夫為信が大浦為則に養子に入り、大浦の総領となって堀越を基地にして石川大仏ヶ鼻城の南部高信、和徳城の小山内讃岐、大光寺城の滝本重行、波岡城の北畠顯村、田舎館城の千徳掃部らを滅ぼし、文禄三年に堀越に移り、ここから慶長五年（一六〇〇）の関



本堂大間



開山堂



位牌堂



達磨大師像



大権修理菩薩像

ヶ原の合戦に徳川勢として三男信牧と共に出陣している。この堀越の地に領内の多くの寺院が移動を命じられ、月峰院も沖館より移り町割りづくりの一隅を成した。

寛政八年（一七九六）四月十七日、堀越を訪れた紀行家菅江真澄の『すみかの山』によれば、統一を為し、堀越に城を構えた為信は慶長六年（一六〇一）三月七日から十日間、堀越城の西、清水杜野に方三町・四面に垣をめぐらし、七間・八間の須弥壇を設け、敵味方、貴賤を問わず、俗名・法号を金泥をもって書き、僧侶百三十名を請し、法華經一萬部転読大法会を行なっている。当院開山学翁保文夫和尚も参じている。その大法会の際には為信が滅ぼした田舎館城の千徳掃部の妻、和徳讃岐守の女が一文を読みその場で自害している。為信は「その女の夫千徳掃部はならびない勇士であった。その妻なればこそ貞女の道を示したものであろう」と涙を落したという。

堀越には月峰院・長勝寺を始め、八力寺院が

集められていた。

しかしこの堀越では、関ヶ原出陣時の留守中の謀叛や、為信の子富姫の婿養子建広の刃傷沙汰があり、大名の城館としては不備があったことと、さらに全国的に高まった新城築城気運により、領内全土を完全に統治し得る政治・経済の中心地と城を求めた。移転計画を兵法学者沼田面松齋に命じ慶長八年（一六〇三）隣地の金沢・二ツ石のあたり高岡（鷹岡とも、現弘前市）に決定し、地割り、町割りを策定した。

弘前禅林街誕生へ

慶長十二年（一六〇七）十月、長男信建が療養中に死亡。為信も同年十二月五日同じく京で病により死亡。二男信堅は関ヶ原合戦ですでに死亡。将軍家に目通りしていた三男信牧が津輕二代目藩主となり、高岡の築城を進めた。

慶長十五年（一六一〇）二月、堀越の寺院に對して高岡に移ることを命じた。同十六年五月、城が完成。同十七年最勝院（真言宗）を郡内諸



多聞天像



広目天像



延命地藏菩薩像



本尊 十一面観世音菩薩像



古松の今上碑

月峰院が移転して来る前から「金沢の化け松」とか「さかさ松」といわれる樹齢数百年の古松があり、昭和十年その木が枯れたあとの木で作った「今上皇帝聖寿萬安」の木牌が寺宝として残っている。

により城下町が繁栄することを願ったものであった。配置は各寺院の消長と共に変わったが、構ができたころは月峰院は赤門の下寺通り奥の右側にあった。その当時、禅林街一帯は金沢と呼ばれていた。

又、現在の赤門脇に配置された理由として、月峰院の山号は貴峯山といい、二つの峰を持つところから敵の侵入を防ぐ、という理由であったという。

宗の寺社総録寺院五百石知行とし、十二カ寺院を集めて城の鬼門（東北・現在の八幡宮一帯）に『最勝院構え』を配置した。

慶長十七年城の南、茂森に月峰院は移転、観音堂を備えていたという。

元和元年（一六一五）三月、高岡の南、茂森山が城より高台にあるために削平し、六月、その跡に堀越を始め、郡内の曹洞宗三十四カ寺院（当時）を集め『長勝寺構え』を構築した。曹洞宗総録所の長勝寺（三百石）と一部の寺院は慶長十七年ごろに移転していた。月峰院は同十九年に再びこの金沢の『長勝寺構え』に移転して来る。今に残る禅林街は高岡城を守るためでもあり、入口には柵形を設け、敵の直進を防ぎ、さらに土塁・水濠をめぐらし、その濠の水は地下で高岡城の外濠に繋がり水量調節を行なうなど、事があれば第二の城郭の役割りも果たしていた。又、寺院を城下に集めたのは領民の宗教心を城下に集中させ、統制しやすくしたこと、信徒が墓がある在地と祈祷する寺を往来すること

歴史は消された？

曹洞宗が津軽地方に伝播した記録は永和元年（一三七五）、陸奥国胆沢郡（現奥州市）の、曹洞宗奥羽二州の本山、大梅拈華山円通正法寺の勧請三祖、道叟道愛禪師が種里（現鱒ヶ沢）に建てた高沢寺で示寂した記録が最初といわれる。その後も種里で江山禪師が大浦の祖光信の帰依により明応元年（一四九二）海蔵寺が、光信の子盛信が大永六年（一五二六）江山禪師の師菊仙禪師によって長勝寺を開山した。為信の引導師は長勝寺八世格翁舜逸大和尚である。長勝寺は總持寺、通幻寂靈禪師開山の越前龍泉寺、越後の宗徳寺の流れである。これらの寺院が平川・浅瀬川流域に広がり、大鰐町三ツ目内に金龍寺（摩寺）乳井の盛雲院、沖館の月峰院へと布教と共に寺院の開創が行なわれた。当時を示すものとして、五所川原に月峰院の檀家があり、弘前迄法事に行くのが不便である、との理由で、元禄時代になって湊村の墓守堂を、月峰院七世

百翁全峰大和尚（当院の歴住簿には記載なし）の時に龍泉庵（寺）として開山したという。しかも戦国時代曹洞宗は高祖道元禪師の只管打坐（ひたすら坐禅すること）の出家仏教を第二義にし、祈祷と葬式を第一として武士、農民の宗教的要求を満たしながら修験（当院では貴峰院）の檀那場を蚕食していったために急速に伸展したものである。但し、そのころの津軽は南部の支配下で、津軽への曹洞宗の伝播は南部との関係をぬきにしては考えられない。しかし、南部に反して津軽を統一した為信、および子孫は南部色の歴史を津軽色に塗りかえ、開山年号・開基・住職の記録を抹殺したり不祥の扱いにしている。月峰院では『歴世法名記』に記されている、『開基奥州柳津ノ円城寺（福島県柳津町臨濟宗円蔵寺のことか）』が本寺であると思われ、開山以前に開地中興和尚が古記録に残されているものの、長勝寺の末寺となった新たな法系による八世中興泊室通禅大和尚以前の法系と歴史は削除されている。



葉師如来坐像

釈迦如来立像

長勝寺の末寺として

慶長十七年（一六一二）、幕府により曹洞宗法度、元和元年（一六一五）、永平寺・總持寺法度が出され、本末関係を提出すること、寛永八

年（一六三一）新寺建立禁止令が發布され、寛永十一年（一六三四）キリスト教禁止令が打ち出された。津軽藩の中でもそれをうけて寛文四年（一六六四）寺社の録起、棟礼の提出、天和元年（一六八一）寺社の制度施行により寺請制度、元禄十六年（一七〇三）曹洞宗嗣法の制により入法嗣承が次々と出された。それをうけた延宝八年（一六八〇）の長勝寺蔵の『開山世代調』には月峰院が長勝寺の末寺であることと、その当時の住職は六世琥外大和尚（生国岩城・但し『当院歴住法名記』では六世は黄山雲鶴大和尚）で、開山して九十年であることが記されている。当院の法系は七世公範徹猷大和尚（元禄十六・一七〇三示寂）まで開山系で、その後長勝寺十六世船叟徒泊大和尚を嗣いだ月峰院八世泊室通禅大和尚（享保三・一七一八示寂）の時に長勝寺の末寺となっている。その時はちょうど津軽藩により入法嗣承が出された時と一致している。以来今日まで長勝寺を本寺としている。



桜と稲荷堂

主な出来事

鎮守稲荷宮遷宮のこと

寛文五年（一六六五）三月十日、五世南翁雲嶺大和尚のとき、江戸谷中の笹森稲荷を勧請した。本尊は茶枳尼天で真狐神とも三狐神ともい、諸難病に靈驗があるといわれ、文化三年（一八〇六）正月、十八世韜嶺謙光大和尚のとき再建し拝殿を設けた。毎年五月十日は禅林街の寺院が集り、神威弥広大に顕れ邦中及び隣国まで知られ、参詣人が多く、寺門に市を成すほどであった。

キリシタン埋葬のこと

宝永七年（一七一〇）八月、古キリシタンで寛永二十年（一六四三）火刑になった伊勢ノ五衛門の娘、中田はるが死亡した時、一度塩詰めで埋葬したものの、その後目付から書き付けが出され、最終的には幕府の沙汰で改めて掘り出し検死の上埋葬し直したことがあった。それらの顛末が詳細に藩日記に残されている。津軽では為信の長男信建と三男信牧が幼少のころキリシタンの洗礼を受けたとされ、禁止令が出された当初は比較的寛容な扱いをし、慶長十九年（一六一四）初めて京坂の信者七十一名が流刑されて来た時は彼らに開墾の仕事を与えた。しかし、寛永十四年（一六三三）鳥原の乱を境に厳禁令が発せられ七十余人が処刑された。月峰院では流刑者の一族中田家の管理をさせられた。キリシタンが壊滅した後には寺請制が厳しく行なわれ武士以外の民は寺院の籍に入ることになり、封建体制維持に幕末まで寺院が利用された。

什物ほか

軸

●幕末三舟の三幅対の軸

一 簾新月半欄花……………宮内少輔 山岡鐵舟

庭涼星文動秋高月色深…海軍郷樞 勝 海舟

溶蘭湯亭休芳華……………槍術劍師 高橋泥舟

●大高源吾の遺書

赤穂浪士の一人で元禄十五年（一七〇二）十二月十四日吉良邸討ち入りの際には茶人羽倉斎と交わり吉良邸の内情を探った。討ち入りを物心にわたり助けた大石右衛門良磨は大石内蔵助の分家筋にあたり、左大臣近衛の家臣であったが、津軽信政に召し抱えられ、江戸詰二百石の臣となった。討ち入り後、浪士の遺品などの保管を託されたという。当院の大高源吾の遺書もそのうちの一つであろう。俳号を子葉という。宛名活徳先生は俳詣の師匠水間湖徳のこと。

其後は彼は御無音、本意に背き候
何れも様堅固ニ御坐成られ候
年来御懸念に飛成候ゆえ
一通相伝候、陳ば拙者事所存之筋
照止難く、
今晚存立申候趣御坐候
御厚情彼是以て生々世々ニ及候事ニ
御坐候

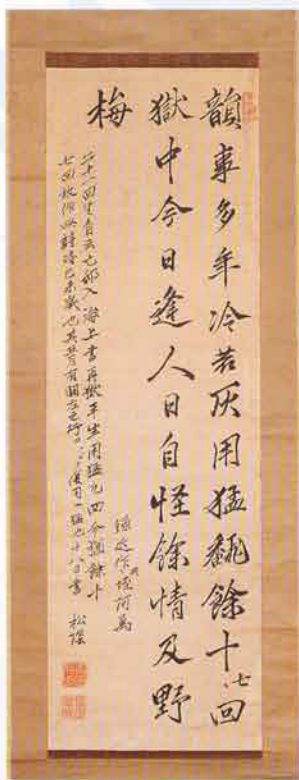
山を裂く ちからも折て 松の雲
海泉は御存じの如くにて候、御恩借の
蒲團申受候て其ま、打捨置候、
一句御引導
願い奉り候

十二月十五日

活徳先生へ

子葉

● 吉田松陰の書。



韻事(詩を作ること)多年、冷やかなること灰のごとし。用猛(生き様)かえて余す十七回、獄中、今日逢人日自怪餘情及野自ら怪しむ、余情、野梅に及ぶを
近作を記し姪阿萬に与ふ
『私二十一回生は嘉永四年十二月十四日、藩邸を亡命し東北に旅し、嘉永六年三月、将及び私言その他を上書し、安政元年三月二十七日下田を出港、安政五年十二月二十六日野山入獄と四度事を行ったが勇んで行なわなければならぬことがまだ十七回もある、それゆえに此詩を作る。安政六年なり……』松陰

長州藩士、山鹿流兵学の家に養子に入る。松
下村塾を開いた開国論者。同じ勅王派の宮部鼎
蔵と共に、弘前藩漢学者伊東梅軒を嘉永五年
(一八五二)三月弘前に訪れる。『東北遊日記』
を書いた。

● 棟方志功画

「御菩薩尊図」。

● 雪鶴画

「倭武多美人画」。

● 大涅槃図

● その他諸軸。



雪鶴画

忌辰録

- 相馬寛斎||津軽藩三筆。
- 成田求馬||戊辰戦争庄内追討隊長。
- 佐藤弥六||海軍術を学び『陸奥評林』『津軽のしるべ』等を著す。小説家佐藤紅緑の父でサトーハチロウ・愛子は紅緑の子。
- 工藤風仙||旧藩士、画人で最勝院本堂に絵がある。
- その他藩士の墓。



棟方志功画

現住職 月峰院第三十五世 泰山義昭

〒〇三六―八二七三

青森県弘前市西茂森一―二一六

TEL (〇一七二) 三三―七六三八



大涅槃図



表紙 毘沙門天像と当院『歴世法名記』